

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：32623

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770242

研究課題名(和文)生活改善運動および新生活運動に関する基盤的研究

研究課題名(英文)Study about improvement of living movement and new life movement

研究代表者

松田 忍 (Matsuda, Shinobu)

昭和女子大学・人間文化学部・講師

研究者番号：00621070

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：第二次世界大戦終了後、欧米諸国は、総力戦に協力した国民に対する対価として福祉を提供し、福祉国家としての道を歩み始めた。その一方、日本では1920年代以降、1950年代まで、国民の生活に負担をかける形での国家構想が練られつづけ、その負担に耐えうる生活の建築をめざす生活改善運動や新生活運動の呼びかけがなされた。上記の問題関心のもと、本研究では、東アジアを対象とする研究者との共同研究体制を構築し、生活の運動にみられる近代日本の特質を解明した。その成果は(1)学会発表5回(うち3回は国際学会、うち1回は2016年度に実施)、(2)研究書・史料目録3冊、(3)論文1本に表れている。

研究成果の概要(英文)：Various countries of Europe and America offered welfare as a consideration to the people who cooperated in a total war after the Second World War. In other words, various countries of Europe and America have begun to walk the way as a welfare state. On the other hand the state plan aiming at the state stability applied a burden to a national life, and kept being built up until after 1920's and 1950's in Japan. Improvement of living movement and new life movement aiming at the living construction which can stand up to a burden were appealed. A joint research system with the researcher who makes East Asia the subject was built and the characteristic of modern Japan seen by living movement was elucidated by this research. The outcome shows in 5 times of academic meeting announcement, 3 study note inventories of historical sources and 1 thesis.

研究分野：日本近現代史

キーワード：新生活運動 東アジア 生活国家

1. 研究開始当初の背景

1920年代から1960年代前半の日本においては、生活改善がブームとなり、生活改善運動や新生活運動(以下、「生活運動」と総称。これはあくまでも本研究成果報告書を作成するにあたっての便宜的な呼称である)が活発に展開した。当時「生活」ということは、「暮らし」の物質的側面(衣食住)だけではなく、人間の内面(精神)をも含めて、人々の「生」をあらゆるタームとして用いられており、ブームとなった生活改善においても衣食住改善(物質面の改善)だけではなく、生活を合理的に営む思想の醸成(精神面の改善)が目指された。

こうした「生活運動」については1980年代に歴史学の研究課題としてとりくまれはじめて以降、地域の運動事例や運動組織などが次々と明らかにされ厚みを増している。

さらに2010年代にはいって、研究代表者は新生活運動協会事務局長を務めた安積得也の関係文書を全面的に使用した新生活運動協会論を展開する(松田忍「第1章 新生活運動協会 一九四〇年代後半～一九六〇年代半ば」および「終章 総括と展望」(大門正克編、大門正克、松田忍、満園勇、井内智子、菊池義輝、鬼嶋淳、瀬川大、久井英輔著『新生活運動と日本の戦後』日本経済評論社、2012年))。1920年代から1960年代前半の日本において、「生活」が歴史用語として、固有な意味を有したことを示し、「生活」を基軸にした近現代日本史の理解が可能であり、また必要であることを示した(松田忍「『生活』の時代、その源流」(『日本歴史』769号、pp27-35、2012年))。

2. 研究の目的

1920年代から1960年代前半における「生活」領域は、政治史、経済史、社会史、民衆史あるいはジェンダー史とも密接に関連する分野で展開しており、基本となる史料を共有するとともに、お互いに研究成果をすり合わせて、歴史像を構築していく必要がある。

その際に、第二次世界大戦をはさむ時期に、東アジアで同時多発的に生活の運動が立ち上がってくることを前提として、東アジアにおける比較研究も必要となる。

以上を踏まえて、しかし実態面の解明は進む一方で、歴史的な位置づけは未だ共有されているとはいいがたい「生活運動」を、一次史料に立ち返って検討し、日本近現代史に正確に位置づけるのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

研究計画作成当初、研究の具体的な方法としては以下の3点を掲げた。

1、2012年度に整理が終了する「安積得也関係文書」の解説、分析、発表。

2、沖縄における新生活運動事例の新規発掘および史料調査。

3、生活に関する運動についての東アジア研究者との研究連携体制の構築。

4. 研究成果

研究の方法1の「安積得也関係文書」については目録および解題を刊行し、さらに重要資料については翻刻(雑誌論文)、学会発表(学会発表)をおこない、研究者との情報共有を推し進めた。

研究の方法2の眼目は、新規の「生活運動」事例の発掘・研究であったが、研究期間中に新興生活運動の機関誌『生活』と出会い、その分析が急務であると思われたため、研究対象を沖縄の新生活運動から新興生活運動へと切りかえ研究を推進した。1930年代に生まれた「生活運動」が組織対象と運動の方法を変化させつつ、戦時期に再編されていくことを明らかにすることができ、その成果は図書として刊行している。

最後に研究の方法3については、韓国・全北大学を拠点に活動する Sciences Korea(SSK)の共同研究員となり、ハングル語論文の発表(雑誌論文 および図書)および2度の国際学会発表(学会発表)をおこなった。韓国におけるセマウル運動と日本の「生活運動」の比較検討など多くの議論がなされている。

また日本人東アジア研究者である井上和枝氏(朝鮮史・鹿児島国際大学)、深町英夫氏(中国史・中央大学)と研究会を開催して、日中韓における生活運動の比較検討をおこない、その成果を研究代表者が企画したシンポジウム(学会発表)にて学会発表した。その内容を紹介する。

日本でおこなわれた生活運動に刺激を受けつつ展開した朝鮮での生活運動は戦前・戦時期にも日本と時期を同じくしつつ、同様の展開を遂げ、独立が実現した戦後(=「解放」後)においても、米軍政の時期などを含め、異なる政治主体が、人びとを内面から把握し、自立心を要請する新生活運動を繰り返し立ち上げていた。極めて日本と似た展開をたどったのだといえよう。

その一方で、蔣介石政権が推進した国民政府の新生活運動は、日本の「風俗改良」と似た人びとの外見的な行動規範の改良にとどまっており、日本とはやや異なる展開であることが、比較研究の成果として明らかになった。

以上のシンポジウムの準備をめぐって、多くの研究者と質疑応答を行った結果、新生活運動は人びとの「生」「生存」に関わる領域でのエネルギーを根拠とする運動であり、同じく人びとの「生」「生存」を扱っている「福祉国家」論研究との関係性を論じることが重要な論点として明らかになった。特に日韓の新生活運動の連動性・同時代性が明らかにな

り、本研究期間終了後、さらにパネルディスカッションで議論を深める予定である（学会発表）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計5件)

松田忍、「生活」の戦争、「生活」の戦後 「生活が運動になる時代」を考える手掛かりとして、日本語文学、査読有、67、2015年、317-339

松田忍、史料紹介 安積得也「第二號 栃木県陣中口授日記」、査読有、学苑、899、2015年

松田忍、【報告要旨・報告文】生活をめぐる戦時と戦後 「安積得也日記」を読む、Modernization and Diary in East Asia、査読無、2014年、100-121

松田忍、〔史料紹介〕安積得也「第一號 栃木縣陣中口授日記」、学苑、査読有、875、2013年、47-72頁

松田忍、新生活運動の政治史的分析 運動を推し進めたエネルギーの源泉について（近代文化研究所所員勉強会（平成24年度）要旨）、学苑、査読無、875、2013年、76

〔学会発表〕(計4件)

松田忍、日本における「生活国家」論の潮流とその展開 1930年代～1950年代、社会経済史学会第85回全国大会パネルディスカッション「生活」と「福祉」の交錯 日本と韓国の生活改善運動・新生活運動をどうみるか、2016年6月12日、北海道大学（北海道札幌市）

松田忍、生活の戦争と敗戦後の民主主義 1930年代から1950年代、史学会第113回大会日本史近現代史部会シンポジウム「生活の運動が立ち上がる時代 日本、中国、朝鮮の比較の視点から」、2015年11月15日、東京大学（東京都文京区）

松田忍、1930年代における新興生活運動の変質から考える、The International Conference of Social Sciences Korea(SSK) and Brain Korea+ Program in Chonbuk National University “Compressed Modernization in East Asia from a Comparative Perspective: Concepts and Practices in Personal Documents”、2015年4月15日、全州市（韓国）

松田忍、生活をめぐる戦時と戦後 「安積得也日記」を読む、Chonbuk National University SSK Personal Document Research Office, Institute of Rice, Life & Civilization・BK21+Program, Dept. of Archaeology and Cultural Anthropology International Conference、2014年3月6日、全州市（韓国）

〔図書〕(計2件)

松田忍、ブックレット近代文化研究叢書11 雑誌『生活』の六〇年 佐藤新興生活館から日本生活協会へ、昭和女子大学近代文化研究所、2015年、96

李廷徳、安勝澤(共編)、池田勇太、陳姪媛、李廷徳、松田忍、何鳳嬌、嚴海建、

李成浩(共著)、
（新生活運動から考えるア
ジアの戦後）、
（東アジア日記研究と近代
の再構成）論衡、2014年、131-150

〔その他〕
ホームページ等
http://gyouseki.swu.ac.jp/swuhp/KgApp?k_yoinId=ymdi geobggy

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田 忍 (Matsuda, Shinobu)
昭和女子大学・人間文化学部・講師
研究者番号：00621070